

犬馬鹿物語

近藤啓太郎著



犬馬鹿物語

著者

近藤啓太郎 ©

発行者

● 吉川正澄

発行所

株式会社 ぶっくまん

東京都港区赤坂二丁目十五番十二号四〇一

電話〇三(五八五)二九八〇

振替 東京五〇八〇五〇一

発売元

● 株式会社 ペップ出版

東京都渋谷区千駄谷三丁目五四番一〜二〇三

電話〇三(四〇四)〇一〇一

振替 東京三〇一二五四五六

印刷所

● ペップ印刷・日本製版株式会社

● 〒100 0093—0014—7629

犬馬鹿物語

近藤啓太郎

著

鼎談

大野淳一

近藤啓太郎

渡辺肇

犬馬鹿物語

装幀Ⅱ 高田修地＋井藤裕子

カバー・表紙写真Ⅱ 峰尾公喜

犬
馬
鹿
物
語

第一章

二十年ぶりで、私は犬を飼う気になった。犬を飼うなら、日本犬がよい。私は野趣に富んだ日本犬が好きで、人為的な西洋犬は嫌いであつた。

私は小学校六年の頃から、日本犬を飼いはじめた。小型の柴犬、中型の紀州犬、四国犬、大型の秋田犬など、終戦の年までの十余年間に、十数頭の日本犬を飼つた。日本犬保存会の展覧会に飼犬を出陳して、優劣を競つて愉しんでいた。

戦争中、私は東京郊外に住んでいたが、附近に軍需工場地帯があつて、毎日のようにB二九の爆撃に襲われた。飼つていた四国犬が爆撃の音を恐れて半狂乱になつた。その四国犬を獣医師の手で安楽死させて以来、私は犬を飼う機会に恵まれなかつたのである。

戦後、私は房州鴨川の漁村に都落ちしてから、土地の中学校に勤める傍ら、小説を描いていた。十年後、小説が売れるようになり、教師をやめたが、まだ犬を飼うだけの余裕がなかつた。

いや、単に犬を飼うだけのことならば、わけはない。が、私は犬を飼う以上、最優秀の日本犬を入手すると同時に、それに適わしい飼育管理が為されなければ、気がすまないのであつた。

教師をやめてから、さらに十年近くたつた頃、私は鴨川の農村地帯に家を建てた。いわゆる野中の一軒家で、敷地は三百坪余りあるので、犬を飼うには最適の場所と言えた。私は家を建てる時から犬を飼う目的で、敷地をフェンスで囲つた。

私は野中の一軒家に移転すると、家族に向つて嬉しそうに言つた。

「やつと、これで犬が飼える」

「どんな犬を飼うんですか」

と妻が言った。

「日本犬だ。犬は日本犬に限る」

「日本犬か。日本犬は勇ましくって、いいなあ」

と小学校二年の長男は言ったが、妻と小学校四年の長女はあまり嬉しそうではなかった。

「日本犬なんかより、名犬ラッシーのコリーなんかの方がスマートで、いいんじゃないですか」と妻が提案し、長女はこう言った。

「耳の大きな犬、いるでしょう。コッカースパエニルっていうの？ あれ、可愛いって好き」

「コリーもコッカーも、あれは馬鹿犬でお話にならないよ」

と私はにべもなく言った。

「コリーは見た眼にはスマートで立派で、いろんな芸当は覚えるかも知れないけど、犬の本能を失っているから駄目だよ。家から一キロも離れれば、もう独りで帰って来れずに迷子になる。見知らぬ人にすぐなついて、ついて行ってしまう。そんな犬でも、いいのか」

「それじゃあ、困るわね。コリーって、そんな犬ですかねえ」

「コッカーはワンワンキャンキャン、一日中鳴きっぱなしで、うるさくてかなわない。それに耳が特別に大きいから、ごはんのときはいちいち耳を頭の上に結んでやらなければならぬ。そうしないと耳がごはんの中へ入って汚れちゃうんだ。そして、耳の病気となりやすい。コッカーに

は耳がくなくて、たまらないのが多いよ。要するに、犬は見た目で飼っちゃあ、いけない。キャラクターを知ってから、飼わなければ駄目だよ」

私に説教されて、妻も長女も黙ってしまった。

「日本犬はいいよ。何しろ、日本土着の犬だから、飼いやすい。それに、めったに吠えないからうるさくなくていい。とにかく、近いうちに東京へ行って、渡辺さんに仔犬を一匹たのんでくるよ」

「渡辺さんて、誰ですか」

「子供の頃からの知合いで、日本犬の権威者だ」

と言ってから、私は改めて渡辺さんについて説明した。

私は中学一年のときに日本犬保存会に入って、毎月の懇親会にも出席した。多くの日本犬愛好家と知合ったわけだが、渡辺さんは私より十六歳年上で、当時は新進の審査員であった。

私は美校生になると、毎年の展覧会で渡辺審査員の補助員として活躍した。その渡辺さんは今日本犬保存会の審査部長になっていた。

「こないだ、犬の雑誌を買ってきたら、その座談会記事に渡辺さんが出ていた。で、その犬の雑誌に電話をかけて、渡辺さんの電話番号を教えてもらったんだ。渡辺さんなら、優秀な仔犬を世話してくれるよ。そうだ」

と私はど忘れしていたことに気がついて、電話をかけに立ち上った。

「犬舎を作るのを忘れていた。さっそく大工にたのまなきゃあ、いけない」

数日後、私は上京すると、渡辺さんに電話をかけた。渡辺さんは二十年ぶりの私を大そう懐しがつて、その日のうちに旅館へ訪ねて来てくれた。暫く旧懷談を愉しんでから、私は言った。

「柴犬にしようと思うんだ。ほんとは、小型より中型の方が好きなんだけど、運動が大変だからね。どこかに柴犬の仔のいいの、いないかしら」

「おるよ。そやけど、今すぐでなくていいなら、うちの牝がそのうちに生むで、それをあげるわ」

「飼うときめると、一日も早くほしくってね」

「そりや、そうや。ところで、展覧会に出す気？」

「いや、もう今度は展覧会に出す気はない。昔は夢中だったけど、今になってみると、犬を自慢して展覧会で競うのは、あんまりいい趣味とは思えないんでね。いい歳をして、犬の順位に一喜一憂して、眼を血走らして夢中になる気にならないな」

「それも、そうやな」

「でも、展覧会には出さないけど、犬はうんといいいものじゃなきゃあ、厭だよ」

「そりや、もちろんそうや。じゃ、さっそく輪違さんにたのんであげよう。知つとるやろ、輪違さん。あそこに、いい仔犬が生まれている筈や」

輪違さんも二十年前の知会いの一人であった。輪違さんは昔、大型の秋田犬に凝っていたが、

今は柴犬の良いものを数頭飼っているという。

結局、渡辺さんの口ききがあった上に、輪違さんも私が再び日本犬を飼うことを喜んで、種犬として家に残しておくつもりだった仔犬を譲ってくれたのであった。

「威獅丸」というのが、日本犬保存会の血統書に記された、その仔犬の名であった。わが家では「イシ」と呼ぶことになった。生後二箇月のイシはまるまると太っていて可愛い上に、品もある。「柴犬の仔犬って、思ったよりとても可愛いし、仔犬のくせにどこかびりつとしたところもありますね。なかなか、いいものだね」と妻は感心して、イシをつくづくと眺めた。

「その辺の柴犬とは、わけが違うよ」

と私は得意であった。

日本犬に賛成だった長男はもちろん、長女もひと眼見るなり、すっかりイシに夢中になった。

「ね、お父さん。今夜、わたし、イシと一緒に寝ていい？」

「駄目だ。犬はなるべく、家の中へ入れちゃあ、いけない。日本犬は小型でも西洋の愛玩犬とは違うんだから、犬は犬らしく飼うのが、いちばんいいんだよ。甘やかすと、日本犬独特のびりつとしたところがなくなってきた、つまらなくなるんだ」

庭の一隅、約三坪をフェンスで囲い、その中に寝小舎を置いた犬舎へ、その夜からイシを入れた。イシは犬舎に入れられて暫くすると、哀しげに鳴きはじめた。が、放っておくと、十分もた

つとあきらめて鳴かなくなった。

次の夜から、イシは全然鳴かなくなった。十一月の特別に寒い夜だったので、妻が心配した。「全然、鳴かないけど、まさか死んじゃってるんじゃないでしょうね。仔犬って、もっと鳴くもんじゃないんですか」

「やたらに鳴くような犬は、駄目なんだよ。気性のいい犬は、仔犬の頃からめったに鳴くもんじゃない。鳴かないのが、良い日本犬の特徴さ。イシはなかなかいい犬だ」

「でも、仔犬のくせに全然鳴かないなんて変ですよ。今夜は馬鹿に寒いし。ちょっと、様子を見て来るわ」

と言って、妻は庭へ下りて行き、間もなく戻って来た。

「イシ、死んでいるどころか、わたしが呼んだら小舎の中から喜んで出て来て、千切れるように尻尾をふってたわ」

イシが妻のあとを追うように、しきりに鳴き出した。

「ほら、みろ。お前が甘やかすから、鳴き出したじゃないか」

「すいません」

が、イシは間もなく鳴きやんだ。

毎日、私はひまがあると、イシを犬舎から庭へ出して、ボールを投げて遊ばした。仔犬の頃はその程度の運動でよい。また、発育のために、首輪はつけなかった。

生後五箇月をすぎた頃から、私はイシに首輪をつけて曳き運動に連れ出した。附近の農道を二キロ程度歩いて帰って来ると、亀の子だわしでイシの全身をブラッシングした。日本犬は綿毛が密で、表毛は硬いから、亀の子だわしでないと、充分にブラッシング出来なかった。

イシは良い毛を持っている。栗のイガを連想させるような剛毛である。毛は本質を象徴するものであって、いかに姿形が良くても、毛の柔らかいような日本犬は駄目なのであった。

また、毛色は裏白でなければならない。イシは赤毛であるが、毛の根本の方は白くなっている。だから、赤毛でもけばけばしい赤ではなく、渋味が感じられてよいのである。赤毛にしろ、胡麻毛にしろ、日本犬の毛色はいふし銀の趣きがなければならなかった。

イシは毛だけではなく、すべての点においてすぐれた柴犬に成長していった。私が過去において飼育した日本犬のいずれよりも、イシはすぐれていた。

前傾した小さな立耳、よく張った頬、暗褐色のやや丸味のある三角形の眼。全体的に気品の感じられる良い顔貌である。

頸は太く、胸は深い。尾も太くて、巻き方も自然である。全身の均整が見事で、歩様も軽快にして弾力がある。強いて欠点をあげるならば、後肢の飛節の角度がやや浅いというだけで、イシはほとんど満点に近い柴犬であった。

私は毎日、何回かイシを庭に放して、惚れ惚れと眺めた。が、そんな私に反して、妻はだんだ

んイシが嫌いになってきた。

「イシの奴、愛嬌がなくなつて、嫌いだわ。気が向かないと、いくら呼んでも、知らん顔なんだもの。尻尾一つふらないわ。こんな犬って、あるかしら」

「そこが日本犬のいいところだ」

と私は機嫌がよかった。

「西洋犬のように、いつそ尻尾をふつて愛嬌をふりまくようなものは、面白くない。西洋犬は奴隷で、日本犬は貴族だよ」

「西洋犬の方が毛がツツヤと輝いて、スマートで、ずっと貴族的だわ。第一、イシは馬鹿じゃないの。誰が来たって、一度も吠えたことがないじゃないの。夜、庭へ放しておいても、あれじゃ番犬にもならないわ」

「誰にでも吠えるような犬こそ、馬鹿だよ。犬は泥棒にだけ吠えればいいんだ。利口な犬は、お客さんと泥棒の見分けがつくよ。日本犬は勘がいいからね」

「イシがそんな利口な犬とは、わたしは思えないわね」

と妻は私がいささか嫉妬的な表情で言い返した。

私は日がつにつれて、日本犬を見る眼を持った人にイシを見せて、自慢したくなってきた。具体的に言うならば、イシを展覧会に出陳したくなってきたわけである。

が、渡辺さんに言った通り、いい齢をした男が公衆の面前で自慢気に犬を見せるのは、あんな

り良い趣味とは思えない。一席になった犬の飼主の得意な笑顔も、末席になった犬の飼主の屈辱的な表情も、見よいものではない。展覧会を見たある人が、犬を見ているよりも血走った眼で一喜一憂する飼主の顔を見ていた方が遙かに面白い、と言ったが、その通りである。

私はそう思うと、展覧会を断念せざるを得ないのだが、庭に放したイシを眺めていると、自慢したい衝動にかられてならない。そして私は追々と、子供のような単純さで犬を自慢すること、人間たまには馬鹿になるのも良いではないか、などと胸の中でつぶやくようになってきたのであった。

ちようどそんな頃、日本犬保存会の千葉支部展が和田町で開催されるという通知がきた。和田町は鴨川から自動車で十分余りのところである。その通知を見た瞬間、私の犬馬鹿の血がどうしようもなく騒ぎ出した。圧えきれなくなった。

私はイシを曳き運動に連れ出すと、先ず立ちこみの練習をはじめた。運動の途中、犬や猫に出食わすと、イシは背の毛を逆立て尾を巻き上げ、全身を緊張させる。その途端、私は立ち止まって、曳き綱を張りきらせながら、「よし、よし」とイシを賞めるのである。

運動に出る度にそういうことをくり返していると、面前に犬や猫の姿がなくても、私が曳き綱を張り切らせ、「よし、よし」と声をかければ、イシは緊張した姿勢を取るようになる。展覧会では緊張した姿勢を持続させて、いつまでも立ちこんでいなければならない。私は運動のときだけではなく、ひまがあるとイシを犬舎から連れ出して、庭で立ちこみの練習をさせた。

それから、私はイシの口に手をかけて、歯を検査する練習をした。これは仔犬の頃に馴らしておくべきことなのである。もはや生後半年をすぎたイシは口の開閉を強制されて、反抗的な態度を示した。が、展覧会では歯の検査も審査の一部なので、私はイシをだましだまし、根気よく口の開閉の練習に努めたのであった。

ある朝、私が起床すると、妻が感動的な表情でこう言った。

「お父さんの言った通り、イシの奴、ほんとうに利口だね。昨日の夜中、イシの吠え声で、わたし、眼が覚めたんですよ。あんまり猛烈な吠え声なので、起きて行って玄關の窓から見たら、門のそばに変な男がうろうろしてるんですよ。その男に向って、イシが飛びかかりそうにして、吠えてるの。すると、男が石を拾ってイシに投げつけようとしたから、誰れって言ってやったら、あわてて逃げて行ったわ。ほんとうに、イシはあやしい奴には吠えるのね。つくづく感心したわ」

「ほんとか。そりゃ、いかん」

と私は言った。

「今夜から、イシを庭に放さないことにしよう。また変な奴が来て、石をぶっつけられて、イシが怪我でもしたら大変だ」

「え？」

と言ったまま、妻はあきれた顔で私を見詰めた。